

# 『源氏物語』研究

——少納言の乳母と浮舟の乳母の描かれ方について——

大槻 葉

## はじめに

『源氏物語』前半に登場する従者や女房達は端役であり、主人の人物性や将来を保証する「機能」として作用し、主人を通して物語に影響を及ぼしている。ところが後半、特に宇治十帖においては一部の従者や女房達が、「一人の人間」として自らの意思で行動し、その活躍が物語に描かれるようになる。このように従者や女房の役割と描かれ方が、実は変化している点は非常に興味深い。近年では従者や女房に注目する論文も増えてきたが、このうち女房については乳母（と乳母子）、親類の女房、召人、その他の侍女というように細分化して理解されるようになってきた。この中でも「乳母」は主に結婚に関わることから、特に物語に大きな影響を与えていると考える。本稿では、「乳母」とそれによって描かれる『源氏物語』について、少納言の乳母と浮舟の乳母を中心に考

察する。この二人はともに「ざるべき人」の代弁者であるが、その描かれ方の変化を通じて、物語の変化を考えたい。

## 一、乳母について

まず平安時代における乳母がどのような定義づけられているかを先行研究に基づいて考えたい。すなわち、山本新吉氏は<sup>注1</sup>

乳母とは一般的に子を育てるために雇った女性のこと、「乳人」「乳媪」「乳婢」とも称している。我が国の国史、貴族記録などでは専ら「乳母」と記し、『栄花物語』『大鏡』などの仮名記録では「めのと」と呼んでいる。

とし、吉海直人氏は<sup>注2</sup>次のように定義づける。

「乳母とは、母親に代わって赤ん坊の授乳・養育に携わる女性のことである。(「うば」とは読まない)

授乳はわかりやすい奉仕の形であるが、次のような歌の贈答を見れば、むしろ養育こそが乳母の最大の仕事というべきである。

めのとせんとてまうできたりける女の乳の細う

侍りければよみ侍ける

大江匡衡朝臣

はかなくも思ひけるかなちもなくて博士の家の乳母せんとは

返し

赤染衛門

さもあらばあれ山と心しかしこくはほそちにてつけてあらず  
許りぞ (後拾遺和歌集)<sup>注3</sup>

ここでの養育は、即ち生涯を通じて近侍するということである。

女三宮の出家後に乳母が尼となって仕えている描写があるように、乳母は基本終身制で、一族で養君に対して奉仕する形をとった。

それゆえに、乳母と養君との繋がりは非常に深いものであった。

乳母が他の女房達と別格の存在であったことは、『枕草子』に「身をかへて、天人などはかやうやあらむと見ゆるもの」と挙げられていることからも窺える。<sup>注4</sup>当然、誰でも乳母になれるわけではな

く、その選任には多くの厳格な基準が設けられた。野々村ゆかり氏は憲平親王(後の冷泉天皇)乳母の選定過程を次のようにまとめている。

①親王誕生前から源正子が乳母として定められ↓②誕生翌日、五月二五日に橘等子↓③七月二八日以前に藤原郁子↓④八月四日に東宮坊序始めが行われた後、八月九日に藤原五福子が選任されたことが認められる

源正子は父が文徳天皇孫であり、師輔の従姉妹でもあった。また、橘等子は父橘好古が文章生出身であり、儒家の家系の出身であった。皇族の乳母は養君が立太子し、元服すると通常従五位に叙せられたという。<sup>注5</sup>同じ女官としては典侍が従四位下だったこと、通常皇族や上流貴族の子女の乳母となるのは中流貴族階級の女性たちであったことを考慮すれば、乳母は養君の成長にに応じてまさに破格の地位に上り詰める存在であった。

また、養君の性別によって乳母と養君の親密さは異なる。養君が女君の場合、乳母は生涯を通して身辺に仕えるが、男君の場合には元服を境に行動範囲が大きく拡大し、乳母との繋がりは薄くなっていく。しかし『和泉式部日記』<sup>注6</sup>に

侍従の乳母まうでのぼりて「出でさせたまふほどに、このこと人々申すなるは。なにのやうごとなききはにもあらず。使はせたまはむとおぼしめさむかぎり、召してこそ使はせたまはめ。かるがろしき御歩きは、いと見苦しきことなり。」

と苦言を呈する場面があるから、男君の場合であっても乳母はふつうの女房とは一線を画し、結婚という重要な事柄に口を出すことができる立場であるのだろう。この時代の乳母の仕事は、親などのもとで養君を養育し、養君にとつて最も良い選択に導くよう補助することであつた。

では、『源氏物語』では乳母はどのような意味を持つているのか。吉海氏は、物語に授乳の場面が皆無であることから、「結局乳母は、授乳という本来の職務からは完全に切り離されており、養君の方もすでに成人している場合が多い」と指摘する。実際、乳母が物語で活躍し、「役割」を果たすのは、養君の結婚に関わる場面であつた。またこのとき重視すべきは、結婚相手の善し悪しについて進言するにしても、あくまで「さるべき人」の補助だということだろう。「さるべき人」に関しては朱雀院の次の言が忘れがたい。

すべてあしくもよくも、さるべき人の心にゆるしおきたるま

まにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず。(若菜上④三三)

結婚がどのような結果になつても、それが「さるべき人」の意見によるものであれば、本人の責任にならない、とする。米田真木子氏は、「さるべき人」を、「庇護者」を表す表現を包括する言葉<sup>注6</sup>とし、女君の場合は「親」「結婚相手」「後見」のいずれをも指すとしている。

この時点における女三宮の場合は父朱雀院をさし、宮の結婚について乳母に頻繁に意見を求めているのだが、あくまで乳母は補助であつて決定権はなく、結婚相手を推薦することはできても、最終的な判断を下したり、責任を取るのには「さるべき人」朱雀院であつた。とはいえ乳母はこの「さるべき人」と一体であり、通常意見を連えることはない。

多くの乳母は物語の途中、つまり養君が結婚すると、次第に描かれなくなる傾向にある。逆に言えば、結婚に関わる場面では乳母は養君の成人後も近侍しているのが確認できる。『源氏物語』では男君の乳母の例は、女君のそれよりも記述が少ないのだが、二条院に住む源氏が五条付近に住む乳母を訪ねたり(夕顔巻)、夕霧が二条東院で勉強に励む一方で乳母は三条宮にいる(少女巻)こ

とから、終身制であったにしても、女君とは違って、成人後は必ずしも同居しないのが通例だったようである。

さて、『源氏物語』の乳母を扱う上で避けて通れない存在がある。乳母子である。乳母子は乳母以上に史料が乏しく、その定義づけは困難だが、文学においては吉海氏の「ある時は恋の仲立ちとして暗躍し、ある時は機密保持の役割を担っており、乳母子と養君はいわば運命共同体」という指摘が最も適当であろう。養君の「乳母（ひいては養君の両親）に知られると不都合」な事に関する隠蔽には第一に乳母子が関わる。夕顔の変死については惟光が、女三宮の密通は小侍従が、浮舟の密通は右近がそれぞれ隠蔽している。宇治にいる浮舟のもとへの匂宮の忍び歩きに、何かと世話をするのも乳母子の時方である。平時において、乳母子は乳母の陰に隠れることが多い。しかしながら乳母子は乳母より劣るといふわけではなく、物語後半においては「密通をよびおこすもの」として設定されている。<sup>註10</sup> 薫や夕霧は世間が許さない忍び歩きをしなから乳母子が発言しないのかもしれない。換言すれば「さるべき人」の意向からの自由度において、乳母子は乳母との明確な相違点をもち、別の役割を持って物語に登場している。

また『源氏物語』において「乳母子」と明記されるのは、弁（藤壺）、侍従（末摘花）、小侍従（雲居雁）、弁（柏木）、時方（匂

宮）、大徳（浮舟）の六例である。乳母がいるのであればそこには乳母子が存在するはずだが、乳母と比べると「乳母子」と明言される例は随分と少ない。乳母子として最も名高いのは惟光であるうが、彼は大徳の乳母の子であって「乳母子」と明記されず、単に文脈から乳母の子であるとわかるだけである。例えば浮舟の右近の場合、乳母の子と明記されてすらおらず、乳母に対する態度や発言からそう類推されるだけである。しかし、浮舟の「乳母子」と明記された大徳は男性なので、「乳母子」の明記がより養君と親密であるのを表すものでもないようだ。従って本稿では「乳母子」と本文中で称されてなくとも、乳母の子であれば乳母子として扱うこととする。「乳主」も、同様に乳母子として扱うものとする。

強いて言えば、「乳母子」と称されているのは登場回数が極めて少ない人物達であるから、「養君と特別な信頼関係のある女房や従者」ということを読者に印象付けるためにわざわざ明言されているのではないか。例えば末摘花の乳母子、侍従は蓬生巻で再登場するが、その際も「乳母子」と称される。『源氏物語』で、二度登場する「乳母子」は侍従のみである。末摘花は侍従と別れた後、源氏と再会を果たし幸福を得るが、侍従がただの女房ではなく「乳母子」であると明示することによって、少ないエピソードながら侍従との別れによる悲哀が強調されていると言えよう。

## 二、少納言の乳母

少納言の乳母（以下、少納言とする）は若紫と共に登場し、尼君の死後、特にその登場場面が増える。「はかばかしき」乳母と言われる少納言の活躍ぶりを考えるには、まずは「さるべき人」尼君の意向を確認する必要がある。

「いとうれしう思ひたまへぬべき御事ながらも、聞こしめしひがめたることなどやはべらん、とつつましうなむ。（中略）

御覧じゆるさるる方もはべりがたければ、えなむうけたまはりとはとめられざりける」とのたまふ。（若紫①二二八）

ゆくての御事は、なほざりにも思ひたまへなされしを、ふりはへさせたまへるに、聞こえさせむ方なくなむ。まだ難波津をだにはかばかしうつづけはべらざめれば、かひなくなむ。

（若紫①二二八）

尼君が、源氏の申し出を喜びつつ（波線部）結婚は承諾しない（二重傍線部）のは、若紫本人が精神的に幼いからであった。その後もこの問題は同じ形で繰り返されている。前に述べたが、「さる

べき人」が決めた結婚は、たとえどんなに不幸なものになったとしても、それは「さるべき人」の責任であって結婚した本人の罪にはならない。尼君がこれほど慎重だったのは、若紫の結婚における責任を持つ「さるべき人」だったからである。逆に言えば、同居していない実父兵部卿宮はこの段階ではその資格はない。さて、尼君は臨終も間近と思われた頃になってようやく若紫との結婚を了承している。

「前略」のたまはすることの筋、たまさかにも思しめし変らぬやうはべらば、かくわりなき齢過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ。（後略）」（若紫①二二七）

もつとも「かくわりなき齢過ぎはべりて」とあるから、何年か後のこととしての承諾に過ぎないものでもあった。これ以降尼君の病状は悪化し、死去してしまう。

ここで実父の兵部卿宮が次の「さるべき人」となるのはいくつかの問題があった。第一に、継母（音）による継子いじめの可能性があり、保護者としては不安があった。だからこそこれまで尼君は若紫を実父に委ねなかつたのである。加えて、「かくわりなき齢過ぎはべりて」と承諾したのは尼君の考えであり、父兵部卿宮の意向

をうかがうとなれば継母の考えも無視できず、要はせつかくの尼君の承諾が白紙に戻る可能性があつた。源氏にとつて尼君の死は、若紫との唯一の接点を失うことであり、若紫たちが北山から戻つたと聞くと、さつそく弔問に訪れている。

さて、少納言の言動が物語に詳しく描かれるのは「さるべき人の死以降である。自身は決して「さるべき人」ではなく、「さるべき人」の意向に従つて養育するという乳母の役割を担うことを、少納言はいかに考えていたのか。

「宮に渡したてまつらむとはべるめるを、『故姫君の、いと情けなく憂きものに思ひきこえたまへりしに、(中略)』など、過ぎたまひぬるも、世とともに思し嘆きつること、しるぎ」と多くはべるに、かくかたじけなきなげの御言の葉は、後の御心もたどりきこえさせず、いとうれしう思ひたまへられぬべき折節にはべりながら、すこしもなぞらひなるさまにもものしたまはず、御年よりも若びてならひたまへれば、いとかなはらいたくはべる」と聞こゆ。(若紫①二四一)

若紫の母を「故姫君」と呼んでいるのは、少納言はもともと尼君か母に仕える女房だったのだからか。「しるぎ」と多くはべるに「

と、若紫をいじめるだらう継母の手柄をよく知っているのだという。そして源氏と結婚させたいがそれは今ではないという、尼君と同じ結論にたどり着く。若紫の実母の苦悩を、「姫君」の苦悩としてつぶさに見つめてきた少納言こそが、尼君の意向を知悉する代弁者であることを改めて示す叙述である。ただし少納言がそうであっても、肝心の若紫は結婚どころでない子どもであつた。

源氏と少納言の会話に割つて入るような、あまりに子供っぽい若紫の言動に、少納言はつい乳母としては出過ぎた行為に及ぶ。

乳母の、「さればこそ。かう世づかぬ御ほどにてなむ」とて押し寄せたてまつりたれば、(若紫①二四三)

この「押し寄せ」については乳母論としては吉海氏注12が、清水好子氏注13と坂田裕紀子氏注14の論を受け、いずれにしてもこの少納言の乳母の積極的な行為が、源氏を選択した第一歩と見ることに変わりはない、としている。確かにこの「押し寄せ」という語は、いささかぞんざいな乳母の若紫への態度を想像させる。とはいえ、

乳母、「いで、あなうたてや。ゆゆしうもはべるかな(中略)」とて、苦しげに思ひたれば(若紫①二四三)

乳母は、うしろめたなうわりなしと思へど、荒ましう聞こえ  
騒ぐべきほどならねば、うち嘆きつつゐたり。(若紫①二四四)

乳母は、うしろめたさに、いと近うさぶらふ。(若紫①二四五)

とあり、「押し寄せ」の結果源氏が若紫の寝所に入り、添い寝する  
に至つた顛末自体は、少納言の意図したものではないらしい。一  
方ここで初めて源氏は若紫に近寄つて、「今は、まろぞ思ふべき人。  
な疎みたまひそ」(若紫①二四三)と、若紫自身に語りかけた。思  
えば、たとえ「さるべき人」が亡くなつても、姫君自身がしつか  
りしていれば、本人同士が語らつて仲を深め、「さるべき人」の遺  
言に従う形で結婚する一夫という「さるべき人」を得るものでは  
ある。ところが若紫は幼すぎて、自身で結婚の判断を下すどころの  
有様ではない。

結局、少納言にできるのは、若紫を次の「さるべき人」へ託す  
ことである。同じような立場にあつた乳母といえ、夕顔の西の  
京の乳母達が想起される。彼女達は実父内大臣に玉鬘を託すべく  
上京し、結局玉鬘は源氏の養女となつた。以後その養女にしたは  
ずの玉鬘に源氏は恋をして、と、物語は複雑に展開するのだが、  
そこに西の京の乳母達が姿を見せることはない。次の「さるべき

人」に養君を託すという役割を終えたからである。乳母達にとつ  
て源氏はあくまで「実父に代わる保護者」であり、それ以上のこ  
とは期待も不安視もしていない。あるいは源氏がそこを踏み越え  
る物語にならないことを、役割を終え退場してゆく乳母達の姿が  
示唆していたのではあるまいか。

一方若紫の場合、源氏は長く求婚しており、尼君も将来の夫と  
認めていた。少納言が親ではない源氏の侵入に危機感をもち近侍  
していたのは、将来の夫たる源氏ではあるが、しかし現在はまだ  
の保護者―宿直人に留まるように見届けるためであつた。帰途に  
源氏が妹が門の女に言い寄りなどしているのも、少納言に見張ら  
れたこの一夜が「まことの懸想」ではなく終つたこと、それへ  
の源氏の諦めを示している。「まことの懸想」がでなかつた源氏  
にとつて、「まろぞ思ふべき人」という言葉は、恋人でなく保護者  
としての宣言にすり替わらせられている。だからこそ西の京の乳  
母達とは違い、少納言乳母はこの後も、若紫の傍に居続けるので  
ある。

源氏が帰つたあと訪れてきた兵部卿宮の「明日にでも」という  
提案を、少納言は「何かは。心細くとも、しばしはかくておはし  
ましなむ」(若紫①二四八)といつて先延ばしにした。兵部卿宮  
が自邸への引き取りを申し出たのは、客観的に見て「さるべき人」

のいないまま乳母一人で養育の場を整えるのが困難だと判断したからでもある。このまま尼君邸で若紫を養育するのが、尼君の意向を実現させる唯一の方法ではあるが、それは不可能なのであった。一方、源氏は姫君と女房だけの邸は心細いであろうと自身の代わりに男手として惟光を派遣した。この時源氏が直接訪問しなかったのを、「もののはじめにこの御事よ」（若紫①二四九）と女房はあてこすっているが、源氏は少納言の望む通り、恋人ではないのだから仕方がない。「通ひたまはむもさすがにすざるなる心地して、軽々しうもてひがめたる人もや漏り聞かむなど、つつましかれば、ただ迎へてむと思す。」（若紫①二五一）と、世間体をはばかりるのも当然である。とは言え若紫を心配して、毎夕宿直人として惟光を派遣するというのは、すでに半分保護下においているようなものである。右の一文が「ただ迎へてむ」と結ばれているのも、すでに源氏には迎える心づもりはあったのだ。

手紙を送り、宿直人を派遣するという日々のなか、いつものように訪れた惟光は、少納言から「宮より、明日にはかに御迎へのたまはせたりつれば」（若紫①二五一）と聞かされ、源氏に報告した。源氏は、世間に好色がましく聞こえること、女が心を交わしてから盗み出すのは常のことだがあまりに幼い相手であること、父宮にこの件が知られたら「はしたなうすずるなるべき」（若紫①

二五二）など思い乱れつつ、「さてはづしてむはいと口惜しかべければ」（若紫①二五二）、遂に若紫を迎えるべく、直接邸に赴く。

用間に訪れて「押し出」された若紫とともに「まことの懸想」ならぬ一夜を過ごした後、実際に若紫を引き取るまでにこれだけ丁寧な叙述が重ねられている。そうすることで、「将来の夫だが、現在は保護者」であり、「養育の場を提供するものとして盗み出す」という奇妙な据え婚の形を、源氏にも読者にも納得させているのではないか。「さるべき人」尼君の意向は、尼君に残された時間が少なく若紫が幼いという状況のもと、いかにも実現が困難であった。このとき少納言は、「さるべき人」である父に頼る場合の不都合を打ち明け、「押し寄せ」て二人に接点を作り、かつ若紫がいますぐ結婚できない幼さであることを示した。そしてやむをえず源氏は「正式に結婚するまで養育の場を提供する人」の立場を受け容れて自邸に連れ出したのである。

たとえば「政所、家司などをはじめ、ことにわかつて心もとなからず仕うまつらせたまふ。」（紅葉賀②三一七）という措置である。若紫を経済的に支援して安心して養育できる場を整えると同時に、二条院から若紫の住む西の対を独立させ、いわば源氏が直接の保護者でないという体裁を整えることによって、求婚者としての立場をも維持した。<sup>注16</sup> 養育の場さえ整えられれば、少納言は乳



母として実質的な養育を担うことが可能になる。また、これらの一連の出来事は、この女性の素性が不明であるだけに、世間では「かく人迎へたまへり（若紫①二五七）」と醜聞として評されていた。この流言に少納言が反応しないのは、まだ幼く源氏の妻にならない若紫の素性が明確になっても、父兵部卿宮に引き取られるのが関の山で、元の木阿弥か、悪くすればただの醜聞に陥るだけだからだろう。少納言の役割は、尼君の遺言に限りなく沿う形で結婚を実現することに終始している。

ゆえに少納言は、二条院に若紫が引き取られたのちは、「（前略）かく御男などまうけたてまつりたまひては、あるべかしうしめやかにこそ、見えたてまつらせたまはめ。（後略）」（紅葉賀①三二二）と若紫をさとしなどもする。疑似的な親でありつつ求婚者でもあるという源氏の奇妙なあり方を、正しく未来につなげるための有能な養育者たる少納言らしさが端的にあらわれている。その一方で、「少納言は、いとかうもしや、とこそ思ひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、思いたらぬことなき御心ばへを、まづうち泣かれぬ。」（葵②七四）と三日夜の餅や装着など、若紫の結婚の儀礼は少納言のあずかり知らぬところで進んでいく。これは少納言が結婚に責任をもつ「さるべき人」では決してなく、あくまでただの乳母であることを示しているのだろう。

「さるべき人」尼君の意向通り、源氏が「さるべき人」、まずは保護者となり、その後若紫の成長を待ってから夫となり、その幸運が世間に取りざたされ、まさに大団円が保証された（賢木巻）時点で、少納言の役割は完了した。ただし、源氏が京を離れるという異常事態に、再び少納言は登場する。「さぶらふ人々よりはじめ、よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。」（須磨①一七六）と源氏が紫の上にあらゆる財産を預けているのは、紫の上には源氏以外の「さるべき人」がないことのあらわれであり、自身の判断が問われる時になって、その補助者そのとして少納言が最もふさわしいことを示している。少納言は源氏と若紫との関係の変化によって、「さるべき人」の意向のもとでの実質的な養育者として、また女主人の補佐としてその場にふさわしく言動が変化していることがわかる。

普通、乳母の仕事は養育を「さるべき人」に渡すことである。しかし少納言の場合、ただ渡すのではなく「疑似的な親、未来の夫」という形を実現させるように渡さなければならなかった。その途中に少納言は自身で思考し話すことはあるが、それは辿り着くべき正解のための言動であって、本人の個人的な感情はなく、その意味では「機能」的な存在である。だからこそ「氣にする必要がない」ことは全く気にしない。逆に源氏に引き取られた直後、

若紫がどう扱われるかを常に心配しているのは、のちに「心配していた少納言も満足するほどの素晴らしい」ハッピーエンドなのだ」と強調するためである。その点で言えば『源氏物語』前半において女房達は「機能」であつたが、少納言の立場の変化は「機能」というより源氏と若紫の関係を円滑に展開させる「部品」といった方がふさわしいかもしれない。「部品」であつた少納言は自身の意志を持たなかつたが、それゆえに尼君の遺言を正しく実現することができたと言えよう。

### 三、浮舟の乳母

物語最後の女君である浮舟の乳母は宇治十帖の他の従者や女房と同様に、その個人的な人柄や印象が語り手をはじめ、複数の人物によつて語られている。

乳母、はた、いと苦しと思ひて、【語り手】ものづつみせずはやりかにおぞぎ人にて、「もの聞こえはべらん。ここに、いとあやしきことのはべるに、見たまへ困じてなんえ動きはべらでなむ」（東屋⑥六三）

【中の君女房右近】かの乳母こそおすましかりけれ。（東屋⑥

六五）

【浮舟女房】このおとどのいと急にものしたまひて、にはかにかう聞こえなしたまふなめりかし。（中略）右近、「などで、このままをとどめてたてまつらずなりにけむ。老いぬる人は、むつかしき心のあるにこそ」と憎むは、乳母やうの人を譏るなめり。【匂宮】げに憎き者ありきかしと思し出づるも、夢の心地ぞする。（浮舟⑥一一一）

どれも褒められた評価ではないが、乳母にしては随分と筆を割かれている。こうした乳母像は、乳母の役割の変化とどのようにかわつていようか。まず「さるべき人」である中将の君が都にいるにもかかわらず、乳母が描写され続けている点について考えてい。平安時代文学において乳母が活躍するとき、基本的に母など女性の保護者は不在である。女三の宮の乳母が種々発言するのは「さるべき人」が男性だからであり、母など女性がきちんと側にいれば、乳母には「物語における」役割はほとんどなく、尼君存命時の少納言のように姿を現さない。

女性の「さるべき人」と同居している乳母としては、雲居雁の乳母（大輔）、明石の姫君の乳母（言旨の娘）がいる。雲居雁の場

合、両親の離婚とともに祖母である大宮に預けられ、以降は大宮が「さるべき人」として養育していた。しかし夕霧との恋愛をめぐって父内大臣が大宮と対立すると、大輔の乳母の描写が登場する。これは大輔の乳母の選択を通じて、雲居雁の「さるべき人」が大宮から父内大臣に変わったことを示すためで、その後は夕霧と結婚して三条宮にいったところで一瞬姿を見せるが、これは幸福な結婚によって夕霧が「さるべき人」になったという結末を示すためのものだろう。ちなみに少納言も描写されるのは尼君が亡くなって以降なので、これも役割に依じて物語に描かれた例である。宣旨の娘の場合は、源氏が姫君を上京させるべく派遣した乳母であるから、そもそも「さるべき人」は源氏だったということもできる。換言すれば、この乳母の存在によって、実母明石の君や祖父明石の入道が姫君の「さるべき人」ではないことを示したとも評せよう。あるいは乳母の活躍が紫の上に引き取られるまでに集中していることから、明石の君でなく紫の上こそが「さるべき人」たるべき存在であり、紫の上に預けられたことで、乳母はその役割を終えたとみるべきか。しかし浮舟の乳母の場合、その活躍は母中将の君の動向や薫との関係の発生と関わりなく、常に一定であって変化しないので、これらには当てはまらない。つまり浮舟の乳母の役割は、一般的な乳母のそれとは異なるものであ

ると考えられる。この乳母の役割とは何なのだろうか。

もとより乳母は「さるべき人」と一体ではある。しかし古田正幸<sup>17)</sup>氏が「浮舟の実際の母と乳母に関して、実際の親と乳母の立場や考えは非常に近いのだ」と評している通りであれば、少納言が尼君の存命中にほとんど登場しないように、中将の君と共に語られる必要はないはずではないか。たしかに二人の考えは非常に近く、浮舟の女房の右近と侍従が浮舟の相手について意見が分かれているのに対し、中将の君と乳母は薫で一致している。しかしながらよくみると、乳母は最初から「浮舟の結婚相手は薫」という考えで一貫しており、それ以外に考えられないと思うほど固く信じていたが、中将の君は別に薫に固執していたわけではなかった。のちに中将の君は、弁の尼に「よからぬことを引き出だたまへらましかば、すべて、身には悲しくいみじと思ひきこゆとも、また見たてまつらざらまし」（浮舟⑥一六七）とまで言うのだが、これも別に薫に固執しての発言ではない。中の君の夫である匂宮の浮気相手として、軽々しい関係に走ることへの怒りに過ぎないのである。中将の君の場合、浮舟と自身を軽んじる者たちへのコンプレックスを解消するために「浮舟と貴人の結婚」が必要なのであって、「薫そのもの」に拘りはなく、むしろ初めは身分のかけ離れた薫との結婚を反対し、少将と結婚させようとしていた

(東屋⑥三五)。なぜ、当初の二人の考え方はこんなにも異なるのだろうか。

そもそも中将の君は複雑な背景を持つ人物であり、「浮舟の母」以外にも、「八の宮の召人」「中の君の従妹」「常陸介の妻」など様々な立場と役割を持っている。東屋巻に登場して以降は、「浮舟の母」というより、むしろ一貫して「常陸介の妻」として描かれることの方が多い。そして「常陸介の妻」になり、現在暮らしている経緯から、「高貴な人物との結婚」への強烈な憧れと、それが必ずしも幸福なことではないという苦悩を知っていた。だからこそ反対しつつ、望んでもいたのである。

一方浮舟の乳母は、浮舟と薫が結婚するのはとにかく素晴らしいことだとしか考えていない。乳母が

乳母もいと腹立たしく、わが君をかくおとしむることと思ふに、「中略」かく口惜しくいませし君なれば、あたら御さまをも見知らざらまし。わが君をば、心ばせあり、もの思ひ知りたらん人にこそ見せてたまつらまほしけれ。(後略) (東

屋⑥三五)

と言うのは、高貴な人物にこそ浮舟の良さがわかるのだと考えて

いるからだろう。そして純粹かつ一般的な視点から「高貴な人物」と結婚「こそ最高の幸せと固く信じているのである。だから終始浮舟の傍にいても、浮舟が薫といると自分の卑しさを思い知らされ、不安になるのに気がつかない。あるいは乳母は現在の「常陸の介の妻」としてある程度満足している中将の君に、何かしら思うところがあり、だから一途に高貴な人と結ばれる浮舟の姿を望んでいたのかもしれない。ならば両者は尼君と少納言と同じ分身のような関係ではなく、むしろ乳母が中将の君の複雑な役割の一部を拡大しているのだと考えられる。そしてその「役割」が本来の乳母の仕事とはかわりのないものだからこそ、浮舟の乳母は常に一定の活躍でもって描写され続けているのであろう。

また、乳母が描写され続けているということは浮舟の立場が不安定なことのあるわれである。普通、「さるべき人」が一緒にいなければ、姫君が生きていくのは難しく、だからこそ母と娘は同居している。にもかかわらず浮舟の場合、東屋巻での破談以降、母と引き離され乳母のような「さるべき人」たり得ない存在しか傍に居ない状態に放置され、薫との関係も安定的なものではない。

次に乳母の過去が語られるということについて考える。単に乳母の過去が語られるのであれば、そうした叙述は他にも存在する。例えば明石の姫君の乳母である宣旨の娘は、宮内卿の宰相と

宣旨の娘という高貴な出自と、乳母に決まるまでの出来事がかなり詳しく語られていた。その高貴さによって明石の姫君の身分は底上げされ、最終的には紫の上のもとに姫君が無事引き取られるように活躍したのである。また西の京の乳母についても養君である夕顔が行方不明となり、やむをえずその娘である玉鬘を連れて筑紫へ下る経緯が詳しく語られている。いずれもその養君の現状に大きくかわる過去であり、あくまで状況の説明であった。ところが浮舟の乳母の過去は浮舟の背景や状況とは直接関係のないところで明かされる。右近は浮舟の乳母子であり、浮舟入水の折には

さればよ、心細きことは聞こえたまひけり、我に、などか  
ささかのたまふことのなかりけむ。幼かりしほどより、つゆ  
心おかれたてまつることなく、塵ばかり隔てなくてならひた  
るに、今は限りの道にしも我をおくらかし、気色をだに見せ  
たまはざりけるがづらきこと、と思ふに、足摺といふことを  
して泣くさま、若き子どもやうなり。(蜻蛉⑥二〇二)

と嘆いていて、乳母と比較しても遜色がないほど浮舟に対する忠誠心が厚い女房である。その右近によれば右近の姉は二人の男と

関係していたのだが、後から言い寄ってきた方の男に女の気持ち  
が傾いたのを妬んで、先の男が後の男を殺してしまった。それに  
よって先の男は国から追い出され、これもみな女の方に不都合が  
あったのだとして女も東国の田舎人となり乳母(「まま」)は今も  
娘の身の上を嘆いているという。右近の「ほどほどにつけてはた  
だ、かくぞかし」(浮舟⑥一七八)という言葉は、その姉と同じよ  
うな状況にある浮舟に、「げによからぬことも出で来たらむ時」  
(浮舟⑥一八一)と、この先への恐怖をありありと確信させた。こ  
こで男二人の争いに女が巻き込まれたのではなく、女の側に問題  
があったのだとしているのは興味深い。女側の罪を言い立てるこ  
とで、浮舟も罪から逃れられないことが意識され、次は自身と母  
の間でもそのようなことが起こるのではないかと死への思いを  
深めていくのである。このように先に挙げた明石の姫君の乳母の  
例と同じく、乳母の過去は養君(浮舟)に影響を与えているのだ  
が、浮舟の場合は乳母の過去とともに「今に、恋ひ泣きはべるは」  
(浮舟⑥一七九)という乳母の感情が語られ、浮舟もそれに反応し  
ている。つまり、浮舟と乳母の間に人間的な感情の交流が描かれ  
ている。第一部で語られた乳母達の過去は養君についての説明で  
あって、乳母の感情が描かれること自体めつたになく、養君も何  
らかの影響を受けることはなかった。乳母の過去に浮舟が影響を

受けるということは、それが単なる養君の説明ではなく、乳母自身の感情と人生が描かれたことのあらわれである。この乳母は中将の君や浮舟と同じく、役割を超えた人物として描かれているのである。とすれば、乳母の高貴な人物への憧れも「三角関係によって娘を失った」という過去に由来するもので、「もしも自分の娘の相手が高貴な人物であつたら、三角関係にならず娘を失うこともなかつた」と考えていたのかもしれない。<sup>注18</sup>しかしながら乳母が感情を持ち、浮舟のことをこれ程想い、影響を与えたが故に、浮舟を入水に導くのは皮肉と言ふほかない。

このように浮舟の乳母も、そして中将の君も、結果的に自身の判断によつて浮舟を苦しめることになつたが、浮舟を不幸にしようと思つていたわけではなく、むしろ幸福になることを願つていた。中将の君が自身の苦い経験から反対しつつも、かつての憧れを振り払えなかつたのは、自分とは違つて浮舟がその幸福に値するほど素晴らしいと信じ、愛していたからに他ならない。そしてそれは、自身の娘のような不幸な境遇になつて欲しくない、と願つていたのである。両者は自身の人生を鑑みて、最も浮舟が幸福になるであろう選択をした。だからこそ浮舟は幸福になるはずが、このような不名誉な事態になつているのは自分の愚かさゆえだと思ひ込み、こうと知つたら「誰も誰も」悲しむ

だろう、ならばいつそ死んだほうが良いのではないかと、と幾度も考えてしまふ。お互いがお互いの幸福を願っているからこそ、すれ違つていく。

浮舟の乳母は「機能」ではなく、実母の一面を共有し拡大した「人物」である。その役割は通常の乳母の「役割」とは異なるが、乳母としての「機能」を失つたわけではなく、「人物」となつたゆえに独自の感情や思考が生じ、少納言が若紫を導いたような「素晴らしい結末」に導くことができなくなつた。また、実母の一面を共有することは、そのゆがみを拡大する形で代弁するということであり、乳母は浮舟に中将の君の望む、実際にはとても難しい未来を、唯一の幸福の道として常につきつけていた。それは母の望むままに生きられない自分を見出してしまつた浮舟にとつて、大きな心理的圧迫であつただろう。乳母の浮舟に幸福になつてほしいという願いこそが、浮舟を入水へと追いつめていくのである。

#### 四、まとめ

平安時代の乳母は養君を「さるべき人」のもとで養育し、幸せな結末に導くことが仕事である。ただし実際に決断し責任を負うのは「さるべき人」であり、乳母はあくまでその決断と実行を補助し、見届ける存在に過ぎない。

『源氏物語』前半の乳母もそうした役割を担うために登場しているの、「さるべき人」が不在、または同居していても実は「さるべき人」が別の人物であるといったときに登場するが、養君を行くべきところへ連れていくと役割が終了し、退場してしまう。

少納言の乳母の役割は複雑だが、それはこの時の若紫の置かれた状況のために、「さるべき人」の選択が複雑になっているからであつて、彼女自身に付された性格や過去も、そうした複雑な役割を果たすために必要なものでしかなく、役割が完了すれば消えていく。『源氏物語』前半のほかの乳母達と比較すると圧倒的に个性的に見えるかもしれないが、少納言も乳母の領分から一步も出ない存在なのである。

一方、浮舟の乳母の場合は「さるべき人」である中将の君が存命であるから、「さるべき人」を求めて行動する必要はない。にも関わらず描かれ続けるその役割は、もはや本来の史実から確認できる乳母の仕事内容からは離れており、「中将の君の複雑な個性の中の一部を共有し拡大して」物語に据え続ける、優れて物語上の存在となっている。彼女が存在し続けることで、物語の展開に大きな影響を与えられており、その意味では機能的に役割を果たすべき乳母の領分からは逸脱した人物と言えよう。

両者が描かれたのは同じ「結婚」にまつわる物語だが、少納言

が関わる若紫の物語は、「現実を超えた素晴らしい結婚に向かつていく」物語であつた。若菜上下巻に入り、「現実を超えた理想」は再び現実を引き据えられ、その限界がさまざまに測られることになるのだが、少納言がいるあいだは少なくとも「幸ひ人」の結婚となるべく展開していた。そう物語を展開させる部品が少納言なのであつた。一方浮舟の物語は「素晴らしい結末に辿り着けない」物語である。中将の君も乳母も浮舟自身も互いに相手を思いやり、浮舟の幸せを考えていたはずが、浮舟を追い詰め入水を選ばせてしまう。それぞれの人生の重みが、必然的に素晴らしい結末から浮舟を遠ざけてしまう。そういう人生の一つとして、乳母が個性豊かにえがかれている。少納言と浮舟の乳母はそれぞれの物語に相応しい存在として用意されているといえよう。

#### 注

注1 山本信吉「摂関政治時代の乳母について」（『むらさき』第五〇輯、二〇一三年二月）

注2 吉海直人「源氏物語の乳母学 乳母のいる風景を読む」（世界思想社、二〇〇八年九月）

注3 藤原通俊撰 久保田淳 平田喜信校注『新日本古典文学大系 八 後拾遺和歌集』（岩浪書店、一九九四年四月）



注4 清少納言著、松尾聰、永井和子校注・訳『新編日本古典文学全集

一八 枕草子』(小学館、一九七二年八月)

注5 野々村ゆかり「撰関期における乳母の系譜と歴史的役割」(『立命館  
文學』第六二四号、二〇二二年一月)

注6 菅原孝標女著、犬養廉校注・訳『新編日本古典文学全集 二六 更級  
日記』(小学館、一九九四年九月)

注7 注2吉海氏前掲書

注8 米田真木子『源氏物語』における「さるべき人」の行方―「親子」

「後見」「結婚」のはざま―(『物語研究』第五号、二〇〇五年三月)

注9 注2吉海氏前掲書

注10 吉海直人『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』(世界思想社、  
一九九五年九月)

注11 乳母とともに他の邸に引き取られるというのは(若紫の場合実現し  
なかったが)雲居雁も同様である。こちらは引き取られた三条宮に  
おける保護者の大宮(雲居雁祖母)が雲居の雁をかわいがっていた  
ので問題はなかったが、乳母である大輔はもとから仕えていた宰相  
の君(夕霧乳母)と比較すると軽い扱いになることは避けられない。

注12 注2吉海氏前掲書

注13 清水好子「侍女たち」(『源氏の女君』、塙書房、一九八三年)

注14 坂田裕紀子「源氏物語の乳母―その役割について―」(『物語文學論  
究』第三号、一九七八年二月)

注15 むしろここで通常の結婚の例を持ち出すのは、この結婚がそうでな  
いことの証である。

注16 源氏が玉鬘に興味を持ちながらも一線を越えられなかったのは、彼

が玉鬘の保護者ということに縛られていたからであると解する。

注17 古田正幸「浮舟の母と乳母―『源氏物語』と乳母・乳母子―」(『東  
洋大学大学院紀要』第四五号、二〇〇九年三月)

注18 「御命までにはあらずとも」とあるので、少なくとも右近はそう思っ  
ているであろう。

〔付記

本文引用はすべて『新編日本古典文学全集 源氏物語』(小学館)の表記、  
頁数による。

(おおつき しおり 博士前期課程一年在籍)